

日蓮大聖人御書全集

じびようだいしょうごんじついもく

治病大小権実違目

新版
1329
ゝ
1334

じびようだいしようこんじついもく

治病大小権実違目

こうあんがんねん

弘安元年('78)

がつにち

6月26日

さい

57歳

ときじようにん

富木常忍

ときにゆうどうどのごへんじ

富木入道殿御返事

にちれん

日蓮

ごしようそく

い

えきびよう

こうじよう

とううんぬん

御消息に云わく「およそ疫病いよいよ興盛なり」等云々。

そ

ひと

ふた

やまい

いち

み

やまい

ち

夫れ、人に二つの病あり。一には身の病。いわゆる、地

だいひやくいち

すいだいひやくいち

かだいひやくいち

ふうだいひやくいち

いじようしひやくしびよう

大百一、水大百一、火大百一、風大百一、已上四百四病

やまい

ほとけ

じ

なり。この病は、たとい仏にあらざれどもこれを治す。

じすい

るすい

ぎば

へんじやくとう

ほうやく

じ

いわゆる治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬、これを治する

癒

い

に

こころ

やまい

にいゆて癒えずということなし。二には心の病。いわゆ

さんどくないしはちまんしせん やまい

やまい にてんさんせん ろくしとう

る三毒乃至八万四千の病なり。この病は二天三仙・六師等

じ がた

しんのう こうていとう ほうやくおよ

も治し難し。いかにいわんや、神農・黄帝等の方薬及ぶべ

しや。

こころ やまい じゅうじゅう せんじん しょうれつわ

ろくどう

また心の病、重々に浅深・勝劣分かれたり。六道の

ぼんぷ さんどく はちまんせせん こころ やまい しょうぶつ しょうじよう あごんきよう

凡夫の三毒・八万四千の心の病は、小仏・小乗の阿含経、

くしゃ じようじつ りつしゅう んんじ にんし じ

俱舍・成実・律宗の論師・人師、これを治するにゆいて愈

しょうじよう ものとう しょうじよう もと

えぬべし。ただし、この小乗の者等、小乗を本として、

だいじよう そむ

こころ そむ

だいじよう

あるいは大乘を背き、あるいは心には背かざれども大乘

くに かつ なら
の国に肩を並べなんとする、その国・その人に諸病起こる。
しようじようとう

小乗等をもつてこれを治すれば、諸病は増すとも治せら
じ

るることなし。諸大乘経の行者をもつてこれを治すれば、
しようだいじようきよう ぎようじや

すなわ へいゆ けごんきよう じんみつきよう はんにゃきよう だいにちきようとう

則ち平愈す。また、華嚴経・深密経・般若経・大日経等

ごんだいじよう ひとびと おのおの おと すぐ おも けん お

の権大乘の人々、各々「劣れるを勝ると謂う見」を起こし

わ しゆう ほけきよう さいとう すぐ

て、我が宗はあるいは「法華経と齐等」、あるいは「勝れ

もう ひとおお しゅつたい こくしゅとう

たり」なんと申す人多く出来し、あるいは国主等これを用

さんどく はちまんしせん やまいお

いぬれば、これによつて、三毒・八万四千の病起こる。か

みずか えきよう じ ばいぞう

えつて、自らの依経をもつて治すれども、いよいよ倍增す。

ほけきよう

おこな

しるし

きよう

すぐ

たとい法華經をもつて行うとも驗なし。經は勝れたれど

ぎようじゃ

びやつけん

もの

ゆえ

も、行者、僻見の者なる故なり。

ほけきよう

にきよう

しやくもん

ほんもん

法華經にまた二經あり。いわゆる迹門と本門となり。

ほんじやく

そうい

すいか

てんち

いもく

れい

にぜん

ほけきよう

本迹の相違は水火・天地の違目なり。例せば、爾前と法華經

いもく

そうい

にぜん

しやくもん

そうい

との違目よりもなお相違あり。爾前と迹門とは、相違あり

そうじ

へん

あ

しよせつ

はつきよう

にぜん

といえども相似の辺も有りぬべし。所説に八教あり。爾前

えん

しやくもん

えん

そうじ

にぜん

ほとけ

しやくもん

ほとけ

の円と迹門の円は相似せり。爾前の仏と迹門の仏は、

れつおう

しようおう

ほうしん

ほつしんこと

しじよう

へん

おな

劣応・勝応・報身・法身異なれども、始成の辺は同じきぞ

いま

ほんもん

しやくもん

きようしゆ

く

し

変

目

かし。今、本門と迹門とは、教主すでに久・始のかわりめ、

ひやくさい 翁 いっさい おさなご

百歳のおきなと一歳の幼子のごとし。弟子また水火なり。

ど せんご ほんじやく こんごう

土の先後いふばかりなし。しかるを、本迹を混合すれば、

すいか わきま もの

水火を弁えざる者なり。

ほとけ ふんみよう と わ たま ほとけ

しかるを、仏は分明に説き分け給いたれども、仏の

ごにゆうめつ いま にせんよねん あいだ さんごく いちえんぶだい うち

御入滅より今に二千余年が間、三国ならびに一閻浮提の内

ふんみよう わ ひと かんど てんだい にほん でんぎよう

に分明に分けたる人なし。ただ漢土の天台、日本の伝教、

ににん わ たま そうら ほんもん

この二人ばかりこそほぼ分け給いて候えども、本門と

しやくもん だいじ えんかい ふんみよう せん

迹門との大事に円戒いまだ分明ならず。詮ずるところは、

てんだい でんぎよう うち かんが たも いち とききた

天台と伝教とは内には鑑み給うといえども、一には時来

らず、二には機なし、三には譲られ給わざる故なり。今、末法
い に き さん ゆず たま ゆえ いま まっぼう
に入りぬ。地涌出現して弘通あるべきことなり。
じ ゆしゆつげん ぐつう

今、末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには、
いま まっぼう い ほんもん 広 たも

小乗・権大乘・迹門の人々、たとい科なくとも、彼々の
しょうじよう こんだいじよう しゃくもん ひとびと とが かがれ
ほろ するしあ

法にては驗有るべからず。譬えば、春の薬は秋薬となら
ほう するしあ たと はる くすり あきくすり

ず。たといなれども、春夏のごとくならず。いかにいわん
はるなつ

や、彼の小乗・権大乘・法華經の迹門の人々、あるい
か しょうじよう こんだいじよう ほけきよう しゃくもん ひとびと

は大小・権実に迷える上、上代の国主、彼々の経々に付
だいししよう こんじつ まよ うえ じようだい こくしゆ かがれ きようぎよう つ

いて寺を立て田畠も寄進せる故に、彼の法を下せば申し述
てら た でんぱた きしん ゆえ か ほう くだ もう の

べがたき上、依怙すでに失せるかの故に、大瞋恚を起こし

て、あるいは実経を謗じ、あるいは行者をあだむ。国主も

また、一つには多人につき、あるいは上代の国主の崇重の

法をあらため難き故、あるいは自身の愚癡の故、あるいは

実教の行者を賤しむゆえ等の故、彼の訴人等の語をおさ

めて実教の行者をあだめば、実教の守護神の梵釈・

日月・四天等その国を罰する故に、先代未聞の三災七難起こ

るべし。いわゆる、去・今年、去ぬる正嘉等の疫病等なり。

疑って云わく、汝が申すがごとくならば、この国法華経

ぎようじゃ 怨 ゆえ ぜんじん くに じばつ とう
の行者をあだむ故に善神この国を治罰する等ならば、諸人
えきびよう なん なんじ でしとう 病 し
の疫病しかるべし。何ぞ、汝が弟子等、またやみ死ぬる
や。

こた い なんじ ふしんもつと いわ あ
答えて云わく、汝が不審最もその謂れ有るか。ただし、
いっぽう し いっぽう し ぜん あく むし
一方を知って一方を知らざるか。善と悪とは無始よりの
そう ほう ごんきよう しよしゅう こころ ぜんあく とうかく
左右の法なり。権教ならびに諸宗の心は、善悪は等覚に
かぎ とうかく たが とが あ ほつけしゅう
限る。もししからば、等覚までは互いに失有るべし。法華宗
こころ いちねんさんぜん しようあく しようぜん みようかく くらい そな
の心は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位になお備
われり。元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、元品の無明
がんぼん ほつしよう ぼんでん たいしやくとう あらわ がんぼん むみよう

だいろくてん

まおう

あらわ

ぜんじん

あくにん

怨

あつき

は第六天の魔王と顕れたり。

善神は悪人をあだむ。

悪鬼は

ぜんにん

まつぼう

い

じねん

あつき

こくちゅう

善人をあだむ。

末法に入りぬれば、

自然に悪鬼は国中に

じゅうまん

がしやく

そうもく

なら

しげ

ぜんき

てんか

充滿せり。瓦石・草木の並び滋きがごとし。

善鬼は天下に

すく

しょうけん

希

ゆえ

えきびよう

ねんぶつしゃ

少なし。聖賢まれなる故なり。この疫病は、念仏者・

しんごんし

ぜんしゅう

りつそうとう

にちれん

かた

おお

病

し

真言師・禅宗・律僧等よりも日蓮が方にこそ多くやみ死ぬ

そうろう

そうら

かれ

少

べきにて候か。いかにとして候やらん、彼らよりもすく

病

少

し

そうろう

ふしぎ

覺

そうろう

ひと

なくやみすくなく死に候は、不思議におぼえ候。人の

ゆえ

ごしんじん

ごうじよう

すくなき故か、また御信心の強盛なるか。

と

い

にほんこく

えきびよう

せんだい

あ

問うて云わく、日本国に、この疫病、先代に有りや。

こた

い

にほんこく

じんむてんのう

じゅうだい

当

答えて云わく、日本国は神武天皇よりは十代にあたらせ

たま

すじんてんのう

みよ

えきびようお

にほんこく病

し

給いし崇神天皇の御代に疫病起こつて、日本国やみ死ぬる

なか

過

おう

はじ

てんしやうだいじんとう

かみ

くにぐに

あが

こと半ばにすぐ。王、始めて天照太神等の神を国々に崇め

えきびよう止

ゆえ

すじんてんのう

もう

ぶつぼう

しかば、疫病やみぬ。故に崇神天皇と申す。これは仏法の

渡

とき

にんのうだいさんじゅうだい

いまだわたらざりし時のことなり。人王第三十代ならびに

いち

に

さんだい

こくしゆ

しんかとう

ほうそう

えきびよう

ごほうきよ

一・二の三代の国主、ならびに臣下等、疱瘡と疫病に御崩去

とう

とき

かみ

祈

かな

等なりき。その時は神にいのれども叶わざりき。

い

にんのうだいさんじゅうだいきんめいてんのう

ぎよう

ひやくさいこく

去ぬる人王第三十代欽明天皇の御宇に、百済国より

きよう

ろん

そうとう

渡

こんどう

きようしゆしやくそん

わた

経・論・僧等をわたすのみならず、金銅の教主釈尊を渡

たてまつ

そがのすくねとう

あが

もう

もののべのおおむらじとう

し奉る。蘇我宿禰等、「崇むべし」と申す。物部大連等

しよしん

ばんみんとう

いちどう

ほとけ

あが

の諸臣ならびに万民等は、一同に「この仏は崇むべからず。

あが

かなら

わ

くに

かみ

いか

くに

破

もし崇むるならば、必ず我が国の神、瞋りをなして、国やぶ

もう

おう

りようほうわきま

さんさい

れなん」と申す。王は両方弁えがたくおわせしに、三災

しちなん

せんだい

こ

お

ばんみんみなえきし

おおむらじとうたよ

七難、先代に超えて起こつて、万民皆疫死す。大連等便り

そうもん

そうにとう

恥

およ

をえて奏聞せしかば、僧尼等をはじに及ぼすのみならず、

こんどう

しゃかぶつ

炭

熾

や

たてまつ

てら

おな

金銅の釈迦仏をすみをおこして焼き奉る。寺また同じ。

とき

おおむらじ病

し

おう

かく

たま

ほとけ

崇

その時に大連やみ死ぬ。王も隠れさせ給い、仏をあがめ

そがのすくね

病

し蘇我宿禰もやみぬ。

おおむらじ

こ

もりやのおとどい

ほとけ

崇

ゆえ

大連が子・守屋大臣云わく「この仏をあがむる故に、

さんだい

こくしゆ

病

隠

たも

わ

ちち

病

し

三代の国主すでにやみかくれさせ給う。我が父もやみ死ぬ。

し

ほとけ

しようとくたいし

うまことう

親

まさに知るべし、仏をあがむる聖徳太子・馬子等はおやの

敵

きみ

おん

もう

あなほべのみこ

やかべの

かたき、公の御かたきなり」と申せしかば、穴部王子・宅部

みことう

しよしん いげすうせんにな

いちどう

与

力

ほとけ

王子等ならびに諸臣已下数千人、一同によりきして、仏と

どうとう

焼

払

かつせん

お

けつく

堂等をやきはらうのみならず、合戦すでに起こりぬ。結句は

もりやう

お

ぶつぼうわた

さんじゅうごねん

あいだ

ねんねん

守屋討たれ了わんぬ。仏法渡つて三十五年が間、年々に

さんさいしちなん

えきびようお

もりや

うまこ

う

三災七難・疫病起こりしが、守屋、馬子に討たるのみな

かみ

ほとけ

負

さいなん

や

お

らず、神もすでに仏にまけしかば、災難たちまちに止み了

わんぬ。

のち だいたい さんさいしちなんとう だいたい ぶつぼう うち みだ

その後の代々の三災七難等は、大体は仏法の内の乱れよ

お いちにんにん

り起こるなり。しかれども、あるいは一人二人、あるいは

いっこくにこく いちるいにするい いっしよにしよ

一国二国、あるいは一類二類、あるいは一処二処のことな

かみ 崇 あ ほうぼう ゆえ たみ 歎

れば、神のたたりも有り、謗法の故もあり、民のなげきよ

お

りも起こる。

さんじゅうよねん さんさいしちなんとう いっこう たじ まじ

しかるに、この三十余年の三災七難等は、一向に他事を雑

にほんいちどう にちれん 怨 くにぐに こおりこおり ぐうぐう

えず、日本一同に日蓮をあだみて、国々・郡々・郷々・

むらむら ひと かみいちにん しもばんみん ぜんだいみもん

村々・人ごとに、上一人より下万民にいたるまで、前代未聞

だいしんい お の大瞋恚を起こせり。 けんじみだん ぼんぷ がんぽん むみよう お
見思未断の凡夫の元品の無明を起こ

すこと、これ始めなり。 神と仏と法華經にいのり 奉らば、
はじ かみ ほとけ ほけきよう 祈 たてまつ

いよいよ増長すべし。 ぞうちよう ほけきよう ほんもん ほけきよう
ただし、法華經の本門をば法華經の

ぎようじや 付 のぞ たてまつ
行者につけて除き奉る。

けつく しようぶ けつ ほか さいなんや がた
結句は、勝負を決せざらん外は、この災難止み難かるべ

し。 しかん じつきようじゅうじよう かんぼう てんだいだいしと たま のち ぎよう

止觀の十境十乗の觀法は、天台大師説き給いて後、行
ひとな みようらく でんぎよう おんときすこ ぎよう てきじん

ずる人無し。妙楽・伝教の御時少し行ずといえども、敵人
弱 しかん さんしようしま もう ごんきよう

ゆわきゆえにさてすぎぬ。 止觀に三障四魔と申すは、権經

ぎよう

ぎようにん

さわ

いま

にちれん

とき

を行ずる行人の障りにはあらず。

今、日蓮が時、つぶさ

お

てんだい

でんぎようとう

とき

さんしようしま

に起これり。また天台・伝教等の時の三障四魔よりも、

一入勝

いちねんさんぜん

かんぼう

ふた

いち

いまひとしおまさりたり。一念三千の観法に二つあり。一に

り

に

じ

てんだい

でんぎようとう

おんとき

り

いま

は理、二には事なり。天台・伝教等の御時には理なり。今

じ

かんねん

まさ

ゆえ

だいなん

いろ

かれ

は事なり。観念すでに勝る故に、大難また色まさる。彼は

しゃくもん

いちねんさんぜん

ほんもん

いちねんさんぜん

てんち

迹門の一念三千、これは本門の一念三千なり。天地はるか

こと

ごりんじゆう

おんとき

おんこころ得

そうろう

に殊なりことなりと、御臨終の御時は御心えあるべく候。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ろくがつにじゅうろくにち

にちれん

かおう

六月二十六日

日蓮

花押

左衛門 どの びんぎ おん 帷 た そうら お

さえもん殿の便宜の御かたびら、給ひ候い了わんぬ。

こんど ひとびと ご 齋 さえもんのじようどの

今度の人々のかたがたの御さいども、左衛門尉殿の

ごにつき た お もう たま そうら

御日記のごとく給ひ了わんぬと申させ給ひ候え。

おおたにゆうどうどの 富木 殿 につき

太田入道殿のかたがたのもの、ときどのの日記のごと

た そうら お ほうもん 片 面 さえもんのじようどの

く給ひ候い了わんぬ。この法門のかたづらは左衛門尉殿に

書 そうろう 請 たま ご 覧 そうろう

かきて候。こわせ給いて御らんあるべく候。